

橋本ゼミ 春休み読書課題 感想文

ルソー（本田喜代治、平岡昇訳）（1973）「人間不平等起源論」（岩波文庫 青）
野原和敏

僕が本書を課題図書に選んだ動機は、啓蒙思想について知りたい、手始めに有名なものからという感じです。

まず、ルソーが本書で言いたかったこと、主題は何なのかを理解することに努めました。序文を読むと、「人々を区別している差異の最初の起源は、人間の構造に次々に起こったあの変化のなかにこそ求めなければならない、ということを知るのはやさしい。人間は、誰もが認めるとおり、本来相互に平等である。それは、さまざまな物理的要因がある種の動物の中に今日われわれの認めるような変種を導き入れるまでは、どの種の動物もみな平等であったのと同じである。」人間の構造の変化というのは、注によると、人間は元来一つの種であったが、地球上に拡大するにつれて、風土、食物、生活様式などの影響により人間の心身に変化が生じたために諸民族となって多様化したということの意味します。ルソーは人間は元来平等であったが現在は平等でないということを前提に、なぜ平等でないのかを知るためには、平等であった頃の人間をまず知らなければならないという強い意志があったように思います。人間の不平等を前提にして、と書きましたが、ルソーが問題としているのは社会的な不平等です。この不平等は貧富の差などで、ルソーは「いくらかの人々が他の人たちよりも富裕であるとか尊敬されているとか勢力があるとか、さらには彼らを

自分に服従させるというような特権から成りたっている。」と述べています。この不平等の問題を解決するために、人間が不平等でなかったころの姿を描き出す、これが本書の主題なのではないかと考えました。なお、ルソーは、人間がかつて平等であった状態を自然状態、不平等な現在の状態を社会状態と呼んで区別します。それでは、自然状態の人間（ルソーは未開人と呼んでいます）とはどのような人間だとルソーは結論づけることになるのでしょうか。それは、「森の中をさまよい、器用さもなく、言語もなく、住居もなく、戦争も同盟もなく、少しも同胞を必要としないばかりでなく彼らに害しようとして少しも望まず、おそらくは彼らのだれをも個人的に見覚えることさえしなくてなく、未開人はごくわずかな情念にしか支配されず、自分ひとりで用がたせたので、この状態に固有の感情と知識しかもっていなかった。彼は自分の真の欲望だけを感じ、見て利益があると思うものしか眺めなかった。そして彼の知性はその虚栄心と同じように進歩しなかった。偶然何かの発見をしたとしても、彼は自分の子供さえ覚えていなかったぐらいだから、その発見をひとに伝えることは、なおさらできなかった。技術は発明者ともに滅びるのがつねであった。教育も進歩もなかった。」という、未開人です。

ルソーが本書を書いたもともとの意図は、この未開人の姿を明らかにすることであっ

たと僕は考えますが、ルソーは本書の後半で、未成人が平等から不平等になっていく要因やプロセスも説明しようとしています。先ほど書いたように、人間が平等な状態を自然状態、不平等な状態を社会状態とルソーは呼びましたが、その言葉の通り、社会の形成が不平等を生んだのだとルソーは考えます。社会は人間にとって自然なものではないのに、どうして社会は形成されたのか、またその結果生まれた不平等は人間に何をもたらしたのかについての考えが後半で述べられます。

では、ルソーは何が人間に社会状態をもたらしたと考えたのでしょうか。それは、人間に固有の2つの能力です。それは、自由の能力、それから自己改善の能力です。人間に固有な自由の能力というのは、動物は本能の命令に抵抗することはできないが、人間は自然（本能）の与える命令に従うことも、抵抗することもできるということです。もう1つの自己改善能力というのは、外的な力を借りて、次々とあらゆる能力を発展させ、自らを改善していく能力のことです。この能力が人間に固有であるために、動物には歴史がなく、人間には歴史があるのだと主張します。この能力について、ルソーは次のように言っています。「この特異なほとんど無制限な能力が人間のあらゆる不幸の源泉であり、平穏で無事な日々が過ぎてゆくはずのあの原初的な状態から、時の経過とともに人間を引き出すものがこの能力であり、また、人間の知恵と誤謬、悪徳と美德を、幾世紀の流れのうちに孵化させて、ついには人間を彼自身と自然とに対する暴君にしているものこそ、この能力である」この後、ルソーはどのようにして社会が形成さ

れたのか述べてますが、その詳しい理論は後年の「社会契約論」で説明されることになります。

初めて読んだルソーの著作でしたが、なんとか内容を整理しながら読み進めました。ただ、本書はやはり哲学書だなと感じました。本書の不平等という問題意識は、封建社会の身分制への疑問が根本にあると思います。現代は身分制はほとんどないと言えらると思いますが、格差の拡大など、不平等の問題は依然として大きな問題とされています。しかし、この現代の不平等が、社会の本質的なもので、未開人が社会を形成するようになってしまった以上本質的な解決は不可能である、というのがルソーの主張であるとする、それを知ったところで現に不平等に不満をもつ人たちの不満は少しも解消しないだろうと思います。現実には不平等を感じている人にとっては、本書よりも経済学や法学の方が役に立つと思います。ルソーが考えたことは本当に不平等の解決を目指したものだっただのか、今はそう思えませんが、考えていった先に、本書が経済学や法学よりも有益であることがわかったら、とても面白いだろうなと思いました。

(2351字)

橋本ゼミ 春休み読書課題 感想文

スティーブンスン (岩田良吉訳) (1937)「若い人々のために」(岩波文庫 赤)

野原和敏

岩波文庫赤の本に選んだのは、冒険小説「宝島」で有名なスティーブンスンのエッセイ集「若い人々のために」です。1850年にイギリスのエジンバラに生まれますが、若くして結核にかかり、1894年に44歳で亡くなります。

本書は、悩める青春を送る若者のための人生論です。人生論を楽しく読むには、主張が論理的かどうかはいちいち気にせず、とにかく著者が言っていることをまず信じようという気持ちで読み進めるのが大事だと思います。本書の後半は哲学的でほとんど理解できませんでした。本書の第一、二章は結婚について述べたもので、ここが一番すらすら読めてわかりやすい部分だったので、そこから文章を三つ引用します。まず、第一章の3ページ目から引用します。「実際、私達は私たちの祖先よりもはるかに人生を恐れることが甚だしく、結婚する決心もしない決心もつかない。結婚は恐ろしい。しかし冷たい老年の孤独もやはり恐ろしい。男の友は愉快であるが、彼等は頼み難い。彼らのある者はやがて結婚して私達を邪魔にするであらう。(中略) 男同志の交際は、気楽さと融通性のために、続く間は愉快であるが、それだけに破壊し忘れ去ることも容易である。(中略) 自分の幸福がいかにも儂い土台の上に置かれてあるか、そして運命の一撃か二撃かによつて-死とか

つまらぬ二、三の言葉とか、印紙を貼つた一枚の紙とか、一人の女の明晰とかによつて一ヶ月にしてその友の全部を失ふかも知れないと云ふことを忘れ去ることができない。結婚はこの補ひとしては確かに危ない手段である。二人または三人の代わりに、私達はただ一個の生命に私達の幸福を賭ける。それでもこの方が私達の側にとつても取引がより安全ではつきりしてゐるから、相手の側にとっては尚さらさうである。」

次に引用するのは、第一章の最後の段落からです。「しかしこれから云うことは少し大切である。結婚は非常に厳粛で決定的な段階なので、その畏ろしさに却つて変わり易い思慮なき人々を惹きつける。彼等は定めぬ狂風や潮流の間で散々に翻弄されたり、あまりにしばしば空に描いた島に向かつて船出をしたり、燃える心を抱きながら空を失つて立往生させられた経験から、揺がぬ大地を踏まんがためにすべてを賭けようとする。(中略) 結婚は人生の大道であり、教会の鐘がひびく夏の日曜日とか生きんとする欲望のため眠ることができない夜とかに私達すべてが夢みたことを即座に実現するかのやうに思われる。彼らは結婚が彼等を落付かせ、彼等を変化させるであらうと考へる。教団にでも入る者のごとく、彼等はただ一つの段階を踏めば喧騒から永遠に逃れられるものと想ふ。しかしこれは悪魔の

誘惑である。最後まで、春の風は不安の種を蒔き、行き交ふ人の顔は哀惜の表情を残し去り、全世界はしきりと彼等の耳に警告の叫びを叫び続けるであらう。何故なら結婚は、それが戦場であって薔薇の床ではないと云ふ点において、人生と変わりがないからである。」

どちらの文章も、結婚に理想を抱くことを禁じています。しかし、なぜいけないのか、あまり説得力がありません。では、どうすればよいのでしょうか。スティーブンスンは第二章の終わりで、次のように言っています。「とは云へ、結局、結婚から尻込みするのは戦から逃げ出すのと同然である。私達の力を試す機会を避けることは、果敢に進んで倒れることよりも甚しい失敗である。誘惑に陥らないやうに神に祈ることは正しいが、出遭った誘惑から逃げかくれることはよくない。(中略) 希望とは塩を以って燕を追うことに相応しい、盲ひた、無法で快活な少年である。信は厳粛な、経験を積んだ、しかし微笑んでいる大人である。希望は無知によって生きる。油断なき信は、私達の人生と、境遇の横暴と、人間の決心の脆さとに関する経験の上に築かれる。希望は無条件の成功を望むが、信は必ず失敗を見込み、名誉ある敗北を一種の勝利と見做す。希望は柔和な年老いた異端であるが、信は基督教以後に育ち、夙に謙譲の徳を教へられた。前者においては、人は優雅と徳の極みに一瞬にして飛躍し得ないことを憤るが、後者においては、人は、自分の弱点を意識してあるので、一年を迎へ送つて然もなほ幾分の名誉を保つてみられれば、それだけで自信に満たされる。前者においては、人は天使を妻に望むが、後者においては、人は、彼女も

自分と同様に、誤り多く、思慮を欠き、真実なきものであるが、それと共に又自分と同じく、輝き出ようと努めるさまざまな美点の光で満たされ、無力であるが棄て難い数々の資格で飾られてゐることを知る。私達が希望を以って結婚することは差しつかへない。しかし結婚する前に、人生の相混淆せる教へを会得しなければならぬ。すなわち、人形は中身はおが屑にすぎないが、素晴らしい玩具であること、希望と愛は、徒に、決して実現されない完全を目指してはゐるが、それを固く持ち続けければ、人生の塩ともなり、杖ともなると云ふこと、私たち自身は数々の欠点から成り立つ、言はば不完全の標本ではあるが、その私達も私達の内部に、保存する価値ある愛すべき物を持合わせてゐると云ふこと、人類の大多数はこの浅ましい非難を負はされてはゐるが、寛大な理解を以って臨めば、その中の一人として私達にとつて教訓となり、手本となり、一生の伴侶として立派な妻や夫になれないものはないと云ふことを。このやうに考へれば、私達は絶えず自分の無価値を支へ、容易に友の失敗を許すであらう。否、私達は自分が不完全であると云ふ意識を持つことに賢明な喜びを感じずであらう。何故なら、夫と妻との間の誤りは絶えず二人を刺激してより良き行動をとらせ、一層高い境地において相手を受さうと努めるからである。そしてその失敗の合間には常に、二人を励まし慰める優しい美徳が閃くであらう。」

僕は3つ目の、第二章の最後の段落からの引用にとても感動しました。結婚は、力試し。この文でいう“信”とは、難しいですが、“裏付けのある自信”に近いものではないかと思ひます。裏付けというのは、何か言葉

であれこれと明示できるようなものではなく、様々な経験の末に獲得した満ち足りた状態のようなものです。そしてその裏付けのある自信があるならば、自分が不完全であることがわかっている。両者は一体だと思えます。思えば、誰か他人に怒りを覚えるのは自分は完璧だという思い込みが根本にあるのではないのでしょうか。しかし、“信”は容易に得られそうにはありません。まずは、「失敗を見込み、名誉ある敗北を一種の名誉と見做す」ことを目標にしようかと思えます。「そしてその失敗の間には常に、二人を励まし慰める優しい美徳が閃くであらう。」素敵な言葉だと思えます。

(2802字)

橋本ゼミ 春休み読書課題 感想文

内村鑑三（河野純治訳）（2015）『ぼくはいかにしてキリスト教徒になったか』 （光文社古典新訳文庫）

野原和敏

光文社の古典新訳文庫から選んだのは、内村鑑三の『ぼくはいかにしてキリスト教徒になったか』です。古典新訳文庫は高校2年生の時にカラマーゾフの兄弟で挫折して以来遠ざけていたのですが、今回この本を楽しく読めたので、長年のわだかまりから解放された気分です。この本は、一言でいえば、面白く皆さんにも一読をおすすめ出来る本です。

ところで、皆さんは内村鑑三がどういう人かご存知でしょうか。僕が知っていたのはこの本のタイトルと、不敬事件を起こした、というくらいでした。本を選ぶために書店に行きこの本を目にしたとき、自分が内村鑑三について何も知らないことに気が付き、本書を読書課題の本に選びました。

購入してから気が付いたのですが、この本には訳者がいます。本書は1895年に日本で最初に出版されますが、同年にアメリカでも出版されます。内村氏はアメリカでの出版を強く希望していたようで、原文は英文で、著者（本文のぼく）が日本人であることを最後まで明言しません。

内村鑑三の経歴をここで少し紹介します。1861年江戸・小石川に高崎藩士の家に生まれ、16歳で札幌農学校に2期生として入学、同年中に上級生から強制的にキリスト教に入信させられます。卒業して3年後に私費で渡米し、アマースト大学とハー

トフォード神学校で学び、4年後27歳の時に帰国。その後、教員やジャーナリストとして生活しながら、1895年、34歳の時に本書が日本とアメリカで出版されます。

1930年69歳で亡くなります。本書の構成は、①儒学者でもある父のもとで武家階級として生まれた、内村氏の言葉でいえば“異教徒”としての生活→②強制的にキリスト教に入信させられるものの、学友たちと楽しく過ごした学生時代→③社会人生活→④渡米し、フィラデルフィアの知的障がい施設で看護人として働いたのち、アマースト大学に編入。大学総長で牧師でもあるJ・H・シーリーに強い影響を受け、「キリスト教を真理として信じる」ようになり、卒業後ハートフォード神学校に入学するも、1年で退学して幕を閉じたアメリカでの生活→⑤日本に着くまで、の経験を内村氏が振り返ったもので、ずっとつけていた日記から抜粋しながら、様々な感想や考察を付け加えていくという構成です。

本書を一度通読して思ったのは、儒教、神道の家に武家階級として生まれ、尊敬する祖父母、両親のもと特に不自由なく育った内村氏が、強制的に入信させられたキリスト教をなぜ信じるようになったのか（本文では、「魂に起こった凄まじい変化」と表現されています）、ということでした。実は、内村氏は、序文の第一文で、自分がなぜキリ

スト教を信じるようになったかは本書では書かないと言っています。「これから書くのは、ぼくがどのようにしてキリスト教徒になったか、であり、なぜ、ではない。いわゆる『改宗の哲学』はぼくの主題ではない。ぼくはただその『現象』を説明し、ぼくよりも哲学的思索の訓練を受けた人々に材料を提供するだけだ。」とあります。僕は、内村氏が“なぜ”を書かなかったのは、他人には言いたくない、隠しておきたい悩みがあったからではないか、と思いました。例えば、社会人生活を止めて、渡米する場面。それまで、本書の展開としては、農商務省水産課の職員として新潟県佐渡島で学術調査をしたときの回想が書かれていて、宿の大酒飲みの主人からのお酒の誘い対してきっぱりと断ったところ、感銘を受けた主人もその晩は酒を断ち、宿のおかみさんに感謝されるというエピソードがあって、充実した社会人生活を送っていることが書かれているのですが、段落が変わるといきなり渡米の決意が語られます。「しかし、ぼくの魂の真空は、そんな経験の一つや二つではとうてい埋められるはずもなく、ますますひどくなった。(中略) 異教徒出身のぼくらには思いもよらないような、誠実に心理を探究する者なら誰でも容易に手に入れることができる安らぎと喜びがそこ(アメリカ)にはあるはずだ」キリスト教に入信して以来、内村氏が何か重大な悩み苦しんでいるという記述はなかったのも、渡米せざるを得ないほどの悩みがあるらしいことをいきなり知らされる訳です。また、フィラデルフィアの知的障碍児施設からニューイングランドのアマースト大学に向かう場面では、「ぼくはどうしてもニューイングランドをこの目で見

たかった。ぼくが信仰するキリスト教はもととはといえばニューイングランドから来たものであり、その結果として生じたあらゆる内面的葛藤の責任はニューイングランドにあったからだ。ぼくにはニューイングランドに対してある種の要求をする権利があった。」とあります。そのアマースト大学の学長 J・H・シーリー先生については次のように述べています。「白状すると、この人と接するようになってからぼくを圧倒していた悪魔の力が弱まりはじめたのである。ぼくがもともと抱えていた罪や、そこから派生した罪がしだいに祓い清められていった。」

以上のように、内村氏が何らかの深刻な悩みを抱えていたことは明らかであるものの、その悩みがどのようなものであるのかは言わず、本書の最後の方で言うのかと思いきや結局明らかにしないまま終わってしまいます。

内村氏の悩みとは、いったいどのようなものだったのでしょうか。ぼくが注目したのは、1884年の3月、23歳の時に両親の反対を押し切って最初の結婚をするも、半年ほどで離婚するという、本書には書かれていない出来事です。離婚の数か月後、内村氏は渡米します。ぼくは、内村氏の悩みとは、キリスト教と日本の宗教を自分の中でどう折り合いをつけるかなど高尚などではなく、私生活にかんする、日常的な、誰にでもある青春時代の悩みではなかったかと思えます。巻末の内村鑑三年譜によると、晩年62歳の時に、弟子であった有島武郎が人妻と心中した事件を痛烈に批判し、雑誌に「背教者としての有島武郎」を掲載したとありますが、これも“悩み”に深くかかわっ

ているように思われました。

内村鑑三の悩みとは何だったのだろう、彼の人生をもっと探ってみればわかるかもしれない、そんな感想を持った一冊でした。

(2572字)